緋弾のアリア 【 零 】

Bigsky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア　【　零　】

【Ｎコード】

Ｎ８７４３Ｚ

【作者名】

Ｂｉｇｓｋｙ

【あらすじ】

暁　空　（あかつき　そら）は普通の高校生だが、非日常的な生活を求め、『緋弾のアリア』の世界で武偵になりたいと願っていた。ある日、マンホールから足の生えた箱（？）を引っ張り上げ、お礼として願いを叶えてもらう。武偵にしてくれと。

緋弾のアリアの世界で原作ブレイクしまくる空の運命はいかに？！

エピローグ（前書き）

初投稿です。

まだまだ下手なんですが楽しんでくれる小説を書きたいと思っています！

よろしくお願いしますm（．＿．）m

エピローグ

暁　空

俺の名前。

漢字が２つ。
とか思ったやつは逝け。

まあただの中３です。
妄想癖の。

なんか悲しい過去があるとかはまったくない。
普通オンリー。

そんな俺に、
ある日すごいことが起きた。

……

３月３日

（武偵高にいけたらなぁ…）

一応普通科の私立への進学が決まっているが、妄想癖のため普通から逃げたがる傾向がある俺は学校帰りにそんなことを考えていた。

すると、

『おい』

誰かに呼び止められた。

振り返るが誰もいない。

まわりも見回したがどこにも声の主は見当たらない。

「誰だ？」

『ここだ』

「っ！下！？」

のマンホールから聞こえたぞ。

『おう』

俺は歩き去った。

『まてぃっっっっっ！！！？！』

するといきなりマンホールから糸？みたいのが伸びてきて俺に巻きついた！

「うおっ！？なんだこれ？！！」

『人の話しを聞けっ！」

「いや怪しすぎるだろ！つーか怖いだろ！姿見せろ！！」

『助けろ』

「は？」

『でられん』

なんか地中人に助けを求められた史上最悪の誕生日でした。

おわり。

『いやおわらせんなぁぁぁぁぁ！！！！！』

「はいはい」

『引っ張りあげろ！』

…めんどくさいけど引っ張った。

が、
「っっんがっ……！重っ！？！」
これ1人の重さじゃないぞこれ！？
「んぎぎ・・・うおりゃああああああああああああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁ……………………………？…………………………………………。
マンホールの蓋を綺麗に吹っ飛ばしてでてきたのは
なんか足が生えた箱だった。
「Bダッッッシュ！！！！！！！！！」
どうやったのかわからないが糸みたいなのを解いて俺は逃げた

が、

ぎゃあああ！？？なんか追ってきた！？

キモイ！走り方キモイ！しかも速ぇ！！！

お　　い　つ　か　れ　たぁぁぁうわあああぁぁぁあああ

あぁぁ！！！！？？

ドゴォっ！

箱にドロップキックされ（？）

俺は前のめりに吹っ飛んだ。

近くの空き地に逃げたのだが人がいなくて幸いだった。

「っ！いってぇー…」

「何故逃げる！！」

なんかビグ〇ムの正方形バージョンみたいなのが馬乗りになってる。

しかもめっちゃ重い。

「キモイ！！」

「人を見た目で判断するなァ！！！」

かなりリアルだがそれでも機械だとわかる声で怒鳴り俺の横腹を蹴ってきた

「ぐはぁっ！！？！人？！……お、俺になんのようだ……！」

「お礼」

「お礼がドロップキックとは嬉しくねえなぁ！！？」

「お前が逃げるからだ！！」

「……で、なに？早くお礼でもなんでもして逝ってくれ」

「……ふん。じゃあいおう。なんでも好きな願いを叶えてやる」

「……上限は？」

「ない。金から宇宙滅亡までなんでもだ」

「嘘つけ」

「本当だっっ！！！」

げしっ！また横腹をを蹴りやがった。

「ぐあぁぁ！！？同じところを……っ！」

「早くいえ。帰るぞ」

「ちょっとまて…！」

箱の分際で…！

それはそうと

願い。
緋弾のアリアの世界で、武偵となること。
別にこの世界じゃいいことなんてありゃしない。
この世界は普通すぎて飽きた。
普通じゃない世界にいくことが俺の願いだ。
しかし、この箱にそんなことできるのか？
確かに未来的な感じだけど箱だしなぁ…

「・・・・あー・・じゃあ俺を『緋弾のアリア』…わかるか？その世界につれていって武偵にしてくれ」

「あと２つ」

「え？３つもいいの？
しかも願いについてはノーコメ？」

「……」

「んー・・・じゃあ絶対的な射撃の腕」

「あと１つ」

思いつかん…

そういえばその世界に行くってことはアリアたちもいるってことだよな？

「最後の願いは・・・アリアたちと接触できるようにする。」

「了解。転送。」

「展開はやああぁぁあ！！！」

俺の意識はいったんとんだ

……

再び目を開けたのは同じ場所だった。

なにも変わっていない。

正方形ビグ〇ムが消えたのを除いては。

「やろー…やっぱ嘘つきやがって」

正直がっかりだった。

なんかいきなりラノベ的展開に巻き込まれて（現れたのは美少女でなくビグ〇ムもどきだっが）武偵になれると思っていたのに。

胃にも心にも空腹感をおぼえた俺は家に帰った

これが俺の人生を１８０度変える出会いとはしらずに。

エピローグ（後書き）

まだ緋弾のアリアとは全く関係ありません。
箱もあとからなんなのかわかるので…

エピローグで飽きたかたも面白かろうが面白くなかろうが本番はこれからなので読んでいただけると感激！です。m（．｜．）m

第1弾　新世界（前書き）

本番まで長かった…

でも第一弾です。

第1弾　新世界

家に帰ってから俺は「緋弾のアリア」を最初から読み直していた。

読めば読むほどさっきの出来事が脳裏に浮かぶ。

（なんだったんだあの箱は…つーかなんでマンホールに？つーか願いは？あああああああああ）

途中だったけどもう1時をまわっていたから寝た。

……

「うわあああぁぁぁあっ！！！！」

１００個ぐらいの箱に追っかけられる夢見た。

「あんにゃろー…」

目覚めが悪いまま顔を洗い朝食をとった。

家族は寝ているようで閑散としている。

父と母、あと十歳近く離れた弟と妹の５人家族。

普通の１世帯です。

カップラーメンにお湯をいれ、蓋をしてテレビのリモコンの電源ボタンを押した。

「……て、東京武偵局はこの船舶沈没事件についてはどう対処したのですか？」

は？

いまなんつった？

「この船舶沈没事件は沈没を阻止できなかったその武偵に責任があるのではないですか？」

ブテイ？

いやったあああああああああああぁぁああああぁぁああああぁぁぁぁぁああああぁぁああああぁぁぁぁぁああああぁぁぁぁぁああああぁぁああああぁぁぁぁぁああああぁぁああああぁぁぁっっっっッッッっっ！！！！！！のか？！！！

ウソだろ？！マジかよ！！？

世界感だけは変わってたんだ！

箱！疑って悪かった！！

・・・・だが待てよ。

俺もう進路決まっちゃってんじゃん！

無理じゃん！

武偵高校いけねーじゃん！！

しまったあぁぁあ！
そこいうの忘れてたぁあぁあぁ！！ＯＴＺ

「おう、空。おはよう」
頭の中で絶叫してた俺に起きてきた父が声をかけた。
「なんでお前泣いてんだ？具合でも悪いのか？」
「いや、なんでもない。なんでもない……」
「まあいいか・・・お、豪華客船が沈没したってやつか」
俺もテレビに目を移した。
（あ・・・これキンジの兄貴の…！）

そう、キンジの兄、金一武偵がのっていた豪華客船が突如沈没、しかし乗客は全員無事。１人の武偵を除いて。ってやつ。
でもこれって理子がやったんだよな。
カナも生きてるし。
メディア無能だなｗ

「お前が武偵になったら役に立てる武偵になるんだぞ。」

「はい？」

「はい？じゃないだろ。お前今日から転校だろ？」

「何処に？」

「武偵高！」

「嘘つけ」

「嘘じゃねぇ。今さら逃げる気か？」

・・・

「今何月？」

「4月だろ」

「ここどこ？」

「殴るぞ」

俺は窓にダッシュした。

どこだよここ。

なんか知らないところだった。

ビル、ビル、ビル。
コンクリートジャングルってやつ。
俺の住んでた都内、しかし田舎。
とは全く違う。
つーかここ何階だよ！マンション？！

変わったのは世界観だけじゃなかったのか？
時間も変わってる？！
いやだって俺昨日○＃＊／▽（´Д`）

「今何時？！」

「テレビ」

テレビの時計は７：３６だった。

「学校までどのくらいかなー？」

「バスつかって１時間ぐらいだろ。結構不便じゃないか？別に寮「ＣＨＩ☆ＫＯ☆ＫＵ！！」

俺は部屋に戻って制服（何故武偵高のがあるんだ！）に着替え、体積の増えたラーメンを１分ですすり家をでた。

「遅刻はしたくない！つーかバスは！？バス停知らねーし！！学校の場所知らねーし！！自分ちの場所すら知らねーし！！！」

そこから5分くらい走り回り、やっと武偵高行きのバスをみつけた。走行中の。

「待てぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」

待ってくれるはずもなく、俺は走って土地勘で高校を探しましたとさ。

……

「・・・・・ゼェ・・ハァ、ゴホッゴホッ・・・遅刻・・かな」

武偵高の人口浮島についたのは9時過ぎ。

遅刻確定だ。

「生徒棟はどこだ…」

左右に建物が並びまくりで陸地とそんな変わんねーじゃん！
遅刻という重罪をさらに時間の経過で重くしながら俺は歩きまくった。

ズガガガガガガンッ！！！！
ドーン！！ドガンッ！！ドンッ！！！
突然、左からすごい音が聞こえた。
「まさか…」
俺はこっそり覗きに行くと
いた。やっぱりいた。
キンジだ。しかもヒステリアモードの。
体育館のまわりは鉄の残骸が散乱してあたり一面煙が立ちこめている。
今やったのか。てことは今日が始業式か。
こりゃちょうどいい。
ズカンズカンッ！！

あ、そういえばアリアもこの日転入してきたんだよな。
同時に転入ってわけか。

キンジが転がってきた。
あ、アリアだ。
やっぱ

かわいい……

しかもちっこ！！！

リアルで見るとちっこ！！！

「逃がさないわよ！私は逃走する犯人を逃がしたことは！一度も！ない！ーーーーあ、あれ？あれれ、あれ？」

「ごめんな。」

おお、名場面！

キンジがアリアのガバメントのマガジンを投げた。

のはよかったのだが

こっちに。

キャッチ！

２本同時は無理でした。

俺ってこの先……（うるうる）

ゴツッ

「ぎゃー」

「？！　誰！？」

アリアだけが驚いている。からしてキンジは気づいていたらしい。

さすがＨＨＳ。

「・・・キャッチしてくれると思ったんだが・・すまなかったな」

いやひどいな！？なんでパスする？！！

「誰よソイツ！・・・・っ！ま、まさかアンタの仲間？！ふ、ふ２人してワタシになにする気なの！！？」

変態扱いされちゃったよ。

「君、見ない顔だが転校生かなにかかい？」

「あ、ああ。今日転入することになった（らしい）」

「そうか。よろしく。俺は遠や「アンタ達！変態共はワタシに捕まりなさい！」

「俺は変態じゃねぇ！！」

「うるさいうるさいうるさい！
強猥男らは神妙にーーーわおきゃっ！」

キンジ撒いておいた弾薬に足をとられてすっ転んだ。
悲鳴がかわいー

「逃げるぞ」

キンジに耳打ちされ、俺はそれに従った。

「こ、この卑怯者ー！！
でっかい風穴、開けてやるんだからぁー！」

新世界での初の出会いだった

第1弾　新世界（後書き）

この連載、かなり長くなる予定です…

よかったら最後まで付き合ってくださいッ！

あとコメントもお願いしますっっっつ！！

第2弾　絶対的射撃技術（前書き）

更新遅れましたm（．｜．）m

引越し完了！！快適！快適！はっはっは！

あけましておめでとうございますm（．｜．）m

第2弾　絶対的射撃技術

あの後俺はキンジと一緒に猛ダッシュで生徒棟へ向かった。

入り口に掲示されていたクラス分けの表をみると、

「あ、俺ら一緒だ」

「あれ？俺名前教えたっけ？」

「といいな～」

「？？・・・あ。そうだったな」

「俺は遠山金次。よろしく」

「暁　空。こちらこそよろしく」

いつのまにかヒステリアモードがとけているキンジと教室に向かった。

……

「先生、席はあいつの隣がいい」

最初のＨＲです。はい。

俺も一緒に前にでて自己紹介してって言われて、俺が2番目で、これ。

アリアさん。タイミング。

「よ・・・良かったなキンジ！なんか知らんがお前にも春がきたようだぞ！先生！オレ、転入生さんと席変わりますよ！！」

うるせーよ武藤。俺がしゃべりたいんだよ？

「あらあら。最近の女子高生は積極的ねぇー」

いやまて、先生まで！

「キンジ、これ。さっきのベルト」

アリアさん！？だからタイ「理子分かった！分かっちゃった！ーーこれ、フラグばっきばきに立ってるよ！」

理子ぉぉぉぉぉ！！！！

「ーーつまり2人は、熱い熱い、恋愛の真っ最中なんだよ！」

クラスがザワザワしはじめた。

「」

みんなおれのこと忘れて原作どぉーり進めてるようです。

キンジは机に頭、突っ伏しちゃってるし。

ずぎゅぎゅん！

アリアが拳銃両手に発砲して壁に穴あけた。

……

「恋愛なんて・・くっだらない！
そういうバカなこというヤツはーー風穴開けるわよ！！」

・・・シーン

お？よし！いぃまだぁぁぁ！！

「い「じゃ、じゃあ皆さん！時間なのでＨＲを終わりますよ～♪」

待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！

……

ちくしょう…自己紹介終わってねぇ……いや、してねぇ…

お前ら全員左手見せろ。
ＫＹ線何センチだ。

地理の授業中、俺はＨＲのことを嘆きながら今までのことを思い返していた。

なんだか説明のつかない、すごいことが起きているのは間違いないよな。

俺は昨日?、箱と遭遇。

その後、願いを聞かれ
・この世界を緋弾のアリアの世界にする
・絶対的な射撃の腕
・アリア達との接触
を頼んだ。

そして俺、気絶。

再び起きたが何も変わった様子はなく、家に帰り、寝た。

翌朝起きてみると区外の一軒家からいきなり区内のマンションへ移動していた。
しかもなんと日付は1年と1ヶ月程進んでいた。

となると世界は俺が寝ている間に変わったということだよな。

そして武偵高に転入することになっており、

登校したところ、アリア達に接触。今に至る、と。

今のところ願いは全部叶ってる

ーーかはわかってないな。

絶対的な射撃の腕。

この世界で生きていく為に必要不可欠だと思った願いだ。

まあ、放課後試してみるか。

……

「おい、転入生。」

昼休み、教室でボーっとしていたところを男の教員に呼ばれた。

「なんですか？」

「お前は一般からの転入だからランクの測定はまだだろ？今日の放課後、いくつか測るからな」

なるほど。ランクね。

ちょうどいい。

……

放課後。

「そうそう、お前装備は？」

「は？装備？」

今、強襲科の棟へ移動している。

「校則だろ。『武偵高の生徒は銃器と刀剣の装備を義務ずける』」

「あー忘れてたー」

「忘れてた？！お前ココになにしにきてんだぁ！？」

「いや、いろいろあって…」

「……明日からは装備してくるように！今日は強襲科の倉庫のやつ借りてこい」

そこで俺は通りがかった倉庫に行ってＤＥをとってきた。

「・・・・おい。お前この銃の事、知ってるか？」

「　世界最強の拳銃」

「アホぅっ！素人が撃てるか！変えてこいっっ！」

「いや平気ですから」

たぶん。

「肩はずれても知らんからなっ！」

「大丈夫ですって！」

「〜〜・・・じゃあ最初は強襲科の測定！」

……

「ーー一般高からにしてはやるな・・」

結果は衛生科Cランク。探偵科、Bランク。車輌科、Aランク。狙撃科、Sランク。強襲科Sランク。

「どーもです」

「そうだ。あの強襲科の測定の時に見せた格闘技術はあれか？空手

だな？」

「ああ…はい。」

実をいうと俺は普通オンリーではないかもしれない。

昔から空手をやっていて現在は段免許を取得している。

「空手は意外と武偵では珍らしい格闘技術でな。というか、もともと武の心得がもとからあるやつが少ない。大概はココで習うＣＱＢや自己流技で格闘をしているからな。」

そうだったのか。長い間続けてた甲斐がこんなときにあるとはな。

「射撃は・・・お前本当に素人か？」

「ええ、まあ」ね。

そう、願いは全て叶っていた。

射撃訓練場で測定を行ったのだが、

まさに百発百中（笑）

初めて実銃（しかもＤＥ）を握り、この腕。

狙えば当たる。

しかも狙撃銃でも同じことで、射撃と名がつくモノなら全て絶対的な腕になるらしい。

超快感ｗｗ

俺、戦闘狂になりかねんな。

「お前はもう強襲科か狙撃科決定だな。経験が少ないのはしょうがないがうまくはやれるだろう」

「じゃあそうさせていただきます。もともと志望していたんで」

戦闘系以外に入るんだったらこっちに来てないし。

「じゃあ死ぬなよー」

……

外は夕方で、オレンジが学園島を染めている。

俺はうちに帰るべく、バス停に向かった。

さっき教務科に入るときに携帯をマナーモードにしていたので、戻そうとすると父親から着信が入っていた。

「なんだろ」

父親にかけてみた

「ルルルル……　・・・・・あー、空か。えー、っとなぁ～。うん。あーそのーなぁ～」

なんか様子がヘンだな。

「なんだよ早く言え気持ち悪い」

「・・・・・いや、非常にいいずらいんだな。これが…」

「早くしないと非行に走るぞ」

「うーんそりゃ困る。・・・・・えーっとな、」

「・・・・家がショウシツした」

「ん？もっかい言って？」

「我が家がショウシツしました」

「焼失！！？」

Ｗｈａｔ？！！

「ーーみんなは平気なのか！？」

「いや、たぶんお前は燃えたほうを言ったんだと思うがな、違うほうなんだが・・・みんな元気だし」

「？　違うほう？違うほうってなんだよ！消える消失か？！家が消えるか！！！」

「うーん・・・しちゃったんだな。そ」

ブツっ

おれは携帯を切った。

ヴーッ、ヴーッ

メールきた。

『家が消失してしまいました／（＾ｏ＾）／わたしたちは近くのホテルに止まるので空はどこか友達の家にしばらく泊まらせてもらってください＾　＾ガンバレ～！」

父親はメールだとこうなる。

いやいや／（＾ｏ＾）／じゃねーよ！なにオワってんだよ！！つーか消失ってなんだよ！！誰か説明してくれぇぇぇぇ！！！！

「おう、暁か。」

キンジだ。チャリに乗ってる。

あーもう。キンジしか頼れるのはいないよ・・・

「・・キンジ、あのさ（かくかくしかじか）」

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

「ーー家が消失？なんだそりゃ」

「こっちが聞きたい！」

「まあ・・・・事情は分かったし、別に泊めてやってもいいぞ」

「恩にきる！！」

キンジはチャリで、俺は走って寮に向かった。

台風到来、直前の部屋へ。

第2弾　絶対的射撃技術（後書き）

かなり長くなっちゃいますね…
一話の量これ以上に増やしていいですかね？
コメントお願いします～（´д`　　）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8743z/

緋弾のアリア 【 零 】

2012年1月1日02時47分発行